

ガルエヌテクトCBLを鶏へ確実に投与するために

ガルエヌテクトCBLは、鶏大腸菌症の予防や鶏大腸菌を原因とした生産性低下に対し効果を発揮することが広く知られるようになり、徐々にではありますが導入農場が増えてきました。このワクチンに含まれるワクチン株は、投与された鶏の体内で速やかに消失して同居感染性を示さないという高い安全性を特徴としています。一方で、同居感染性がないことから、ワクチン投与時に免疫されなかった鶏は鶏大腸菌症に対する防御能を獲得することができません。このことから、同居感染を引き起こす他の生ワクチンと異なりワクチンの投与手法に細心の注意を払う必要があり、ガルエヌテクトCBLの免疫を付与する場合は全ての鶏へ確実にワクチンを投与する必要があります。この投与手法については販売開始直後から様々な問い合わせを受け、その手法確立に現場の臨床獣医師を初めとして多くの方々のご協力を得ながら試行錯誤を繰り返してきました。今回のナバックレターでは、その噴霧手法を2例ほどご紹介させていただきます。

◆ 霧大将MSB1500Li[株式会社丸山製作所製]での投与：10,000羽の場合

流量が速くて投与時間が短いだけでなく、バッテリー式で機動性に優れていることから農場での投与に使用されています。

簡便に導入できることから、一部の孵化場でも試験使用されています。

器材

- ワクチン[1,000羽分] 10本、生理食塩液[500mL] 4本、溶解用容器[3L容量]
- 霧大将MSB1500Li(充電済み、45～300分稼働)、微量ノズル5型(SM125-65)2個

溶解

- およそ20mLの生理食塩液をワクチン瓶に入れて固形物を溶解し、液を溶解用容器に移す。
- 全て溶解したら、残りの生理食塩液を加え攪拌した後に溶解液を全て霧大将のタンクに移す。

調整

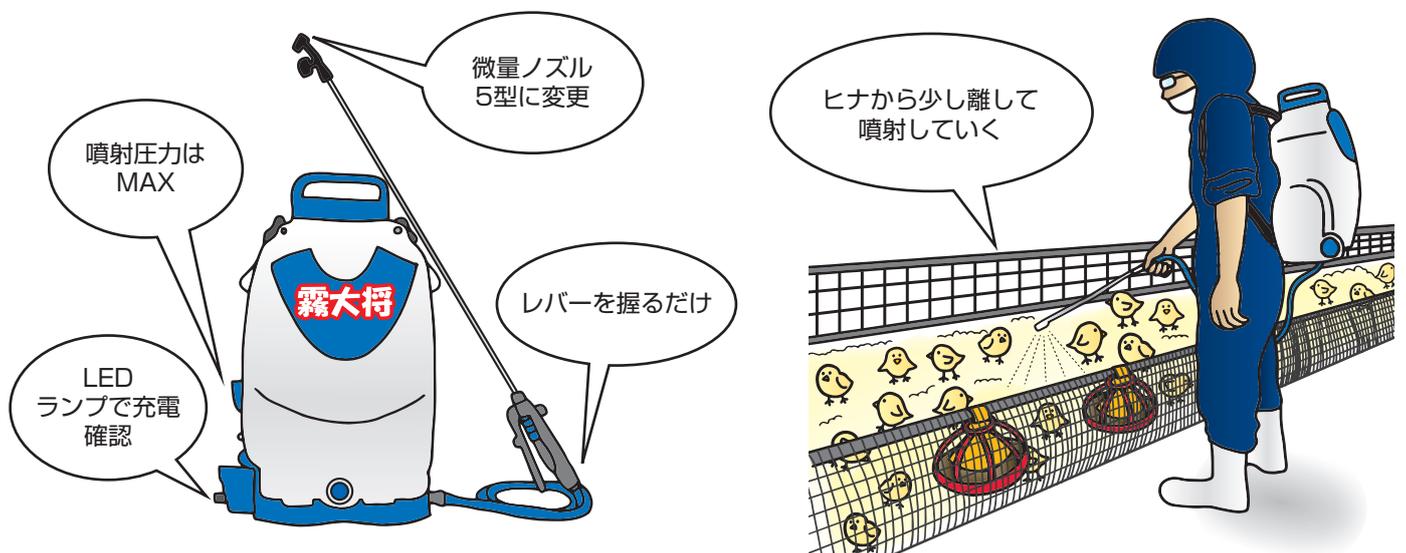
- バッテリー残量を確認した霧大将の噴射圧力をMAXにして、噴射状態を確認する。
[10,000羽分の噴射時間はおよそ10分程度]

準備

- ワクチン液が温まったり、直射日光が当たらない様に配慮して、鶏舎まで移動する。
- 鶏舎内の換気扇を弱め、明るさを調整して作業に支障が無い程度に照明を暗くする。

投与

- 対象鶏に2回ずつ投与できる様に歩行速度を調整して、鶏の頭部目がけて噴射していく。
- ヒナかご(100羽入)の場合は、カゴの上側から約4秒ずつ噴射していく。



◆ ニューコン607 [THOMAS INDUSTRIES INC.製]での投与：10,000羽の場合

他のワクチンでは従来から使用されている噴霧機であり、ガルエヌテクトCBLでもケージで育成中の採卵鶏ヒナへの投与に使用されています。コンプレッサーにコンセントが必要ですが、長い延長コードを使用する事で、大きな鶏舎でも隅々まで投与することが可能になります。

器材

- ワクチン[1,000羽分] 10本、生理食塩液[500mL] 2本、溶解用容器[2L容量]
- ニューコン607、延長コード、タイマー、計量カップ

調整

- ニューコンのエア調整ダイヤルをSにし、30mLの液が60秒で噴射されるように液体調整ダイヤルを調整する [およそ1.1～1.2回転、10,000羽分の噴射時間はおよそ33分程度]。

溶解

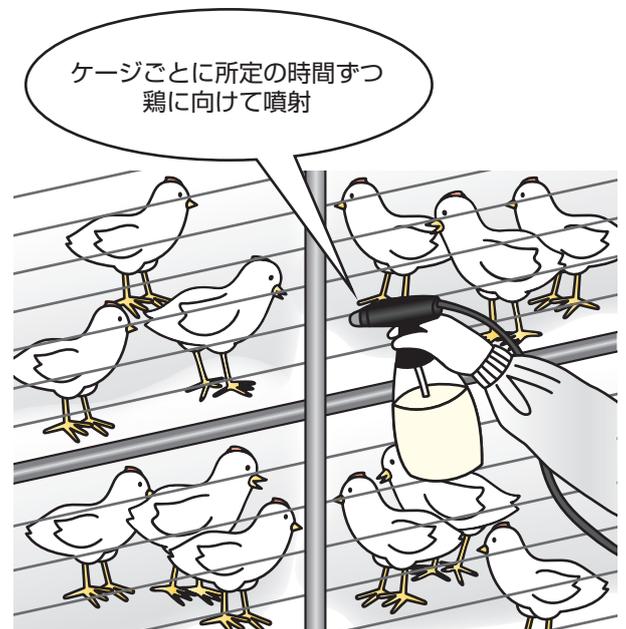
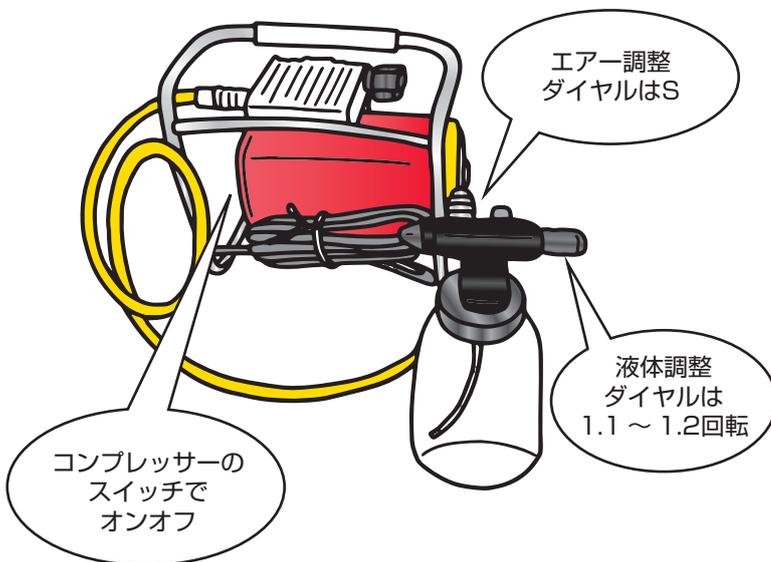
- ワクチン瓶中におよそ20mLの生理食塩液を入れて固形物を溶解し、液を溶解用容器に移す。
- 全て溶解したら、攪拌した後にワクチン液を全てニューコンに移す。

準備

- ワクチン液が温まったり、直射日光が当たらない様に配慮して、鶏舎まで移動する。
- 鶏舎内の換気扇を弱め、明るさを調整して作業に支障が無い程度に照明を暗くする。

投与

- 噴射時間を対象鶏ケージ数の倍数でわり、およその1ケージ当たり2回の噴射時間を算出する。
- 歩行速度を調整しながら、1ケージ最低2回ずつ、ケージ内の鶏に向けて噴射していく。



おわりに

今回ご紹介した2つの機器による投与に加えて、一部の孵化場では株式会社アイピー社製CBL自動噴霧機の設置が進められ、本格的な採用に向けた孵化場投与試験が数多く実施されています。孵化場で初生ヒナに投与する場合は、出荷のためにカゴの中に収容されたヒナへIBワクチンを散霧した後に自動的にガルエヌテクトCBLが噴霧投与される本機は非常に利便性が高いため、今後更に普及していくと考えています。これらの噴霧装置の普及によって、養鶏産業における鶏大腸菌症は、治療ではなくワクチンによる予防への転換がより一層加速していくものと考えています。